

人間関係の固定化に影響する地域クラスター間における 子どもの社会性の比較 —自治体統計を用いた検討—

○高橋 誠 (岐阜大学)

吉澤寛之 (岐阜大学)

キーワード：人間関係の固定化，社会性，地域差

文部科学省 (2015) では、小規模校の児童・生徒の傾向として、集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につけにくい、児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい、などの特徴を持つ可能性が指摘されている。Sullivan (1953) によると、児童期には、他者に対して偏見をもつ傾向があり、子どもの集団の中では、頭が良い、社交的、運動神経がよい、等によって、「人気がある」、「ふつう」、「不人気」などと児童自身が判定される「社会的批判」がなされるという。これらより、小規模校では流動的な関係をもつことができる環境とは異なり、一度他者を根拠のない一方的で、主観的な見方で捉えるようになると、その関係を変化させることは難しくなると考えられる。全国的に学校の小規模化が予測されていることから、人間関係の固定化は喫緊の課題に位置づけられる。

本研究では、人間関係が固定化される小規模校の児童における社会性の課題を明らかにするため、ある県内で調査を実施し、自治体統計を指標とした地域クラスター間で子どもの社会性の比較をする。

方 法

(1) 調査対象校抽出を目的とした小学校の分類

A県内の369校の小学校を、人間関係の固定化に影響すると考えられる自治体統計（人口密度・転入率・転出率）と当該小学校の学級数を指標として、潜在混合分布モデルによる分析を行った。4から7クラスターまでの分析結果を比較し、適合度やエントロピーに基づき6クラスターを採用した（AIC=-1867.870, BIC=-1660.598, SBIC=-1828.748, Entropy=.961）。Figure 1に示す特徴をもつ、6つのクラスターに分類された。対象校については、各クラスターから各市町村の平均学級数に近い学校を2校ずつ、特定の町（第1著者の勤務地域）は全小学校が抽出された。

(2) 測定尺度と調査対象

「人間関係形成」はキャリア意識尺度（徳岡他，2010），「自己制御」は社会的自己制御尺度（原田他，2008），

「共感性」は児童用多次元共感性尺度（長谷川他，2009），「偏見」は偏見尺度（向田，1998），「権威主義」は権威主義的態度尺度（吉川・轟，1996）を用いて測定した。抽出された小学校（19校）で2018年12月に調査を実施し、回答に不備のない児童1737名（4年男子83名，女子65名；5年男子381名，女子411名；6年男子384名，女子413名）のデータを分析した。

結果と考察

分布の非正規性を考慮し、クラスターを独立変数、各尺度を従属変数とした対応のない平均順位の差の検定（クラスカル-ウォリス検定）を実施した結果、すべての変数で有意となった（ $\chi^2(5) = 11.373 \sim 66.463, p < .01$ ）。多重比較の結果、人口密度や転入、転出が多い地域（クラスター2）は、他地域よりも人間関係形成、自己主張、感情・欲求抑制、共感的関心、権威主義が有意に高かった。流動的な環境であると、様々な人と触れ合う経験を積むことで、人間関係形成能力が高まるといえる。人口密度が高くても転入や転出が少ない地域（クラスター1）は、人間関係形成や自己主張が有意に低かった。人口密度が高くても、流動的でない環境では、人間関係形成能力が向上しにくいと言える。逆に、人口密度が少なくても、転入・転出が多い地域（クラスター3）は、視点取得が有意に高かった。流動性のある環境では、他者の視点で考える能力が高まると言える。また、人口密度や転入・転出が少ない地域（クラスター4、5）は、共感的関心が有意に低かった。固定化された人間関係で生活することで、その集団内での自分の立場が決まってしまう、他者への思いやりも困難になると考えられる。

今後は、地域クラスター間の差に影響する要因を明らかにすると同時に、人間関係が固定化される小規模校の子どもの社会性を育成する実践の開発が求められる。

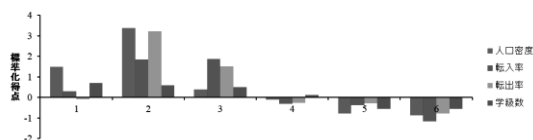


Figure 1 A県内の各学校クラスターの特徴